



男女共同参画社会をめざす

—— ゆうレポート

REPORT

特集：ワーク・ライフ・バランス 誰もが自分らしく生きるために

平成 22 年度
北区仕事と生活の両立推進企業を認定しました

2011.2.25

No.21



ワーク・ライフ・バランス

—誰もが自分らしく生きるために—

北区では、男女共同参画社会を実現するための取り組みとして、「ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）」を推進しています。誰もが「仕事・家事・育児・介護・地域活動」などにバランスよく関わり、自分らしく生きるためには、何が必要なのでしょうか。「ワーク・ライフ・バランス」に詳しく、関連の調査研究を行っており、また北区男女共同参画審議会委員でもある奥津眞里さんに解説していただきました。

独立行政法人 労働政策研究・研修機構 特任研究員 奥津 眞里



やさしさも合理性も

—天秤にのせた「バランス」ではなく

この頃は、新聞や自治体の広報誌などでワーク・ライフ・バランスという言葉が目にします。ワークは仕事で、ライフは生活だから、仕事と家庭生活が釣り合っている、そして、カタカナ語なので外国から新しく採り入れた考え方だろう……と受け止められることがあるかもしれません。

確かにワーク・ライフ・バランスという言葉そのものは、EU（ヨーロッパ連合）などで1990年前後から使われていたものが、日本に入ってきた

たものです。けれども、日本にはその言葉が表わすものは、ずっと以前から働く人々の考えにありました。バラン

スとは、天秤計りの両脇の皿に、仕事と家庭をのせて均衡しているというのではなく、心豊かに生きる多様性のある状況をイメージしていただく方がふさわしいでしょう。調和といった日本語が使われることもあります。

最近、過労死などの過重労働がよく問題にされますが、ワーク・ライフ・バランスはこの言葉とも関係があります。働き過ぎはその人が辛いだけでなく、企業や職場にとってもデメリットになることを、多くの経営者はずっと以前

から気づいていました。働く人が余暇

の時間を確保することは、家庭生活の安定や自己啓発などの学習時間の確保につながります。心身がリフレッシュされることで能率よく仕事ができるようになり、創造力が養われることの大切さが意識されてきました。

たとえば、1960年代から職場に「ゆとりある労働者生活」とか「仕事と家庭の両立を」といった標語の入ったポスターが張り出されていたことを記憶されている方がいると思います。これらの標語の目的は、仕事とそれ以外の生活の時間の両方を共に大切に、元気に活動できるようにな

るということです。ワーク・ライフ・

バランスのひとつの重要な側面です。さらにもっとワーク・ライフ・バランスにはとても大切な面があります。女性や高齢者をはじめ多様な人々が、自分に合った生き方を過重な負担を負わずにできるようになることです。

たとえば、子育てする女性が就業できるような家庭、地域、職場のそれぞれの環境づくりや、高齢になつて本格的な年金生活を始めるまでの、活力を生かせる働く場の確保などで、働き盛りの壮年でも、老親介護に直面して介護と仕事の両立に悩むことがあります。そういつときに、仕事

をとるか介護をとるか追いつめられずに、その人の家族観や職業観が尊重されながら生活の実態に合った解決の道が拓けるような社会にするということも、ワーク・ライフ・バランスの実現です。

人生を通じて必要なもの

—いつ、どのように働くかの視点も

人生にはさまざまな出来事があります。結婚や子育て、就職・退職、家族の看取りのほか、時には病気や怪我などの不測の事態に遭遇することもあります。そうした人生のさまざまな出来事乗り越えて、周囲と調和しながら自分が納得する生き方をするためには、継続就業であれ、中断・再就業であれ、過大な負担を負わずに選択できる環境が必要になります。

ワーク・ライフ・バランスとは、い

つどのように働くかを、その人の意欲と能力、価値観と生活の実態に合わせ

スといえます。個人の多様性と自主的な生き方を認め、個人が自己責任で社会参加のあり方を選び実行できる仕組みをもつ社会であることが、ワーク・ライフ・バランスの前提となります。ところで、日本は少子化がすすみ、これからは働く年齢の人口が減っていきます。社会全体の活力を維持するためには、女性が職場で力を発揮する重要性が増します。それに対応するためには、保育サービスなどの充実が必要なのはもちろんです。しかしその基盤が整ったとしても、女性が結婚・出産をしても仕事を続けることを支える意識が、家族や地域社会に定着することが望めます。地域住民の女性の働き方についての意識のあり方は、社会の将来の発展と深く結びついています。

ワーク・ライフ・バランスを

実現するために

「北区男女共同参画に関する意識・意向調査」という調査が平成20年に行われました。その報告書のなかに、ワーク・ライフ・バランスについての北区の住民と企業経営者の見方が紹

図1 男女ともに働きやすい職場

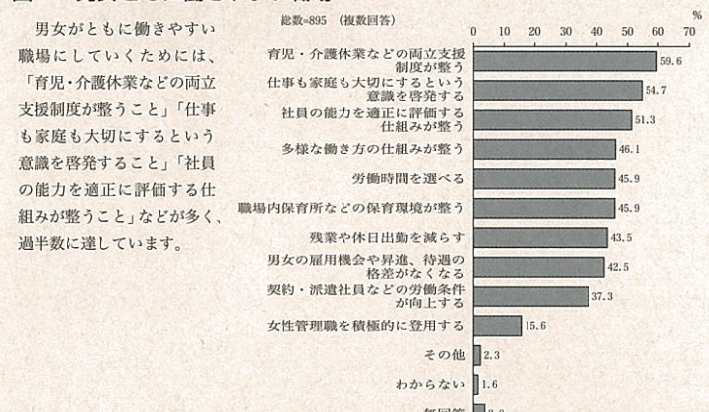
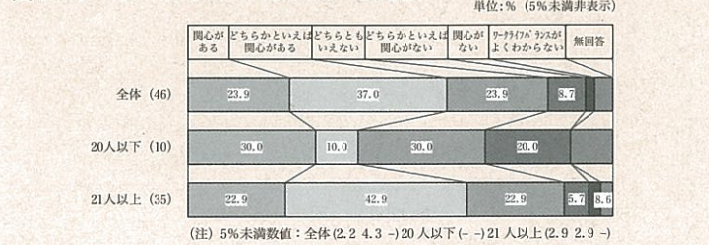


図2 ワーク・ライフ・バランスへの関心



ワーク・ライフ・バランスに「関心がある」「どちらかといえば関心がある」という意見は、正社員の合計人数が20人以下の企業では4割ですが、21人以上の企業では6割を上回っており、ワーク・ライフ・バランスに対する関心がより高いことがわかります。

※「北区男女共同参画に関する意識・意向調査報告書 概要版」平成20年、12ページ

平成22年度 北区仕事と生活の両立推進企業を認定しました

みなさんも、最近よくワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)という言葉を目にすると思います。

ワーク・ライフ・バランスのとれた生活とは、「仕事」と子育てや介護、地域活動等の「仕事以外の生活」が両立でき、双方が充実している状態をいいます。

このためには、これまでの働き方を見直し、時間の使い方を自己管理していくことがポイントです。

ワーク・ライフ・バランスが実現すれば、区民一人ひとりがやりがいや充実感を感じながら働き、仕事上の責任を果たすとともに、子育て期、中高年期といった人生の各段階において、多様な生き方が選択できるようになります。

北区では、仕事と生活の両立支援や、男女がともに働きやすい職場環境づくりに取り組む中小企業を「仕事と生活の両立推進企業」と認定し、その取り組みを応援する制度を平成22年度より始めました。

このたび、平成22年度仕事と生活の両立推進企業に
取り組む中小企業3社を認定しました。第1回認定式を、平成22年11月10日、北区役所第一委員



平成22年度仕事と生活の両立推進企業認定式(平成22年11月10日)
左から丸八土建工業(株)五嶋八重子代表取締役、花川北区長、アネス(株)岸田辰夫取締役会長、(株)十條合成化学研究所 小倉玲子取締役社長

会室において執り行い、区長より認定証を授与いたしました。

なお、平成23年度の「仕事と生活の両立推進企業」の募集は、北区ニュース等でお知らせいたします。

問合せ 北区子ども家庭部男女共同参画推進課
03(3913)0161
区ホームページ <http://www.city.kita-tokyo.jp/docs/service/590/59063.htm>

北区仕事と生活の両立 推進企業認定制度

1 対象となる企業

- (1)区内に事業所を置き、常時雇用する従業員数が300人以下の企業で、かつ区内に本社又は主たる事業所を置く中小企業基本法(昭和38年法律第154号)第2条に定める中小企業者であること。
- (2)労働関係法令が遵守されていること及びその他の法令上又は社会通念上認定するにふさわしくないと判断される問題を起していません。

2 対象となる取り組み内容

- (1)仕事と子育て・介護の両立支援に取り組んでいる。
- (2)男女ともに働きやすい職場づくりに取り組んでいる。
- (3)従業員が地域活動等に参加しやすい環境づくりに取り組んでいる。

3 認定期間

認定決定日から平成30年3月31日まで

4 支援内容

- (1)イメージアップ・PR支援
- (2)区ホームページ・北区ニュースで認定企業の取り組みを掲載。
- (3)区が発行する関係情報誌で、認定企業の取り組みや活動紹介を掲載。
- (4)認定企業パネルを男女共同参画センター「スペースゆう」のギャラリーで掲示。
- (5)経営支援
- (6)区中小企業金融制度の対象とする。
- (7)求人等企業広告掲載料の補助を行う。
- (8)ワーク・ライフ・バランスに関する研修等で男女共同参画センター「スペースゆう」多目的室・フナタリウムホールを使用するにあたり、使用料を5割減額する。

株式会社 十條合成化学研究所

北区滝野川3丁目84番

製造業
・特殊化学薬品製造販売
・写真処理薬品販売

創業 昭和26年

従業員数 44名
(女性 11名)
(男性 33名)

化学を通じて安全で豊かな社会の創造に貢献

主な取り組み

- ・育児休業や子の看護休暇制度の整備
- ・両立支援推進責任者や職場改善委員会の設置
- ・ノー残業デーの実施
- ・一般事業主行動計画を策定
- ・女性管理職の登用

◎代表者コメント

このたび、北区仕事と生活の両立推進企業として認定されましたこと、大変光栄に存じますと共に、その責任の重大さも感じております。

これからも、家庭も仕事も大事にしながら、良い関係を保っていききたいと思っております。



アネス株式会社

北区栄町1番

建設業
・空調・衛生設備工事
・機械器具設置工事

創業 昭和30年

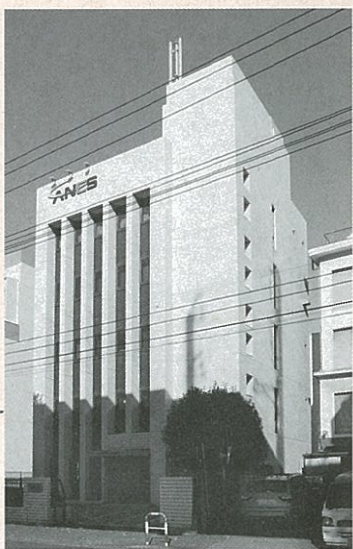
社員数 104名
(女性 9名)
(男性 95名)

企業は人なり 主な取り組み

- ・育児休業や育児休暇の整備
- ・小中学校入学祝い金の支給
- ・育児介護休業中にも対応できる代替職員の確保
- ・女性管理職の登用
- ・連続3日以上長期休暇取得制度

◎代表者コメント

北区仕事と生活の両立推進企業に当社を認定いただきまして、誠にありがとうございます。この認定を機会に、ワーク・ライフ・バランス全般、特に、女性社員が当社で働きながら安心して出産・育児ができる環境の整備に努めます。



丸八土建工業 株式会社

北区神谷2丁目18番

建設業
・給排水設備工事

創業 昭和46年

従業員数 11名
(女性 3名)
(男性 8名)

社員も会社も共に伸びゆく会社

主な取り組み

- ・育児・介護休業や各種休暇制度の整備
- ・育児手当金の支給
- ・長時間労働削減への取り組み
- ・一般事業主行動計画の策定

◎代表者コメント

ワーク・ライフ・バランス推進の取り組みとして一番力を入れたことは、育児に関わる期間に無条件(予防接種・保育園の呼び出し等)で遅刻・早退・欠勤を認めましたこと。そして育児中に会社からも手当てを支給し、収入が下がらないようにしました。

一般事業主行動計画を策定し、他の社員の理解を得る努力もしました。



男女共同参画センターをご紹介します

スペースゆりの歩き方

第4回

「プラネタリウム」

北とびあ6階からガラス張りのスターロードを抜けたところに、スペースゆりのプラネタリウムホールがあります。150名を収容できるこの施設では、月2回日曜の一般投影のほか、保育園や幼稚園、小学校を対象とした貸切投影などを行っています。また、講演会などの会場として多目的に利用されています。

秋晴れの11月20日、私は2歳の娘と「親子プラネタリウム*」にはじめて参加しました。たくさんの親子連れ

で、ホールはほぼ満員。はじめは「おほしまどこ？」と不思議そうだった娘も、ドーム一面に広がる星空に「うわ〜っ」と大興奮！ 暗闇に驚いて泣き出す子もいますが、楽しい星座の話や童話の朗読にだんだんひきこまれていきます。まわりは親子連ればかりなので、子どもが騒いでも気が楽なのうれしい！ 娘と一緒に輝く星たちを眺めていると、30分の投影時間はあっという間。親子ふたりで充実した時間を過ごすことができました。

(22年度ゆうレポート執筆者 瀬戸智子)

プラネタリウム内観



瀬戸さん親子

親子プラネタリウムに集まる人々

*親子プラネタリウム 年4回程度、小さなお子さんと保護者の方が一緒にプラネタリウムを観賞できる人気の催し。

ひと@スペースゆり

男女共同参画センター「スペースゆり」や北区にゆかりの人、自分らしさを大事に生きる人を紹介します。

第4回 第3期北区男女共同参画審議会 公募により新しく委員になられた方を紹介します。

厚美 薫さん

暴力のない社会づくりや女性や子どもの貧困問題、ワーク・ライフ・バランスの推進など取り組まなければならない課題は山積。委員の皆さんとともに、喫緊の課題に少しでも踏み込んだ提案ができればと考えています。



高橋明彦さん

男女共同参画が、特別な配慮を行わずに実現できないのだろうかという思いが参画の動機です。共働きの伴侶と共に、家庭を築こうとする娘を持つ父親として、一区民の観点で参加していきたいと考えています。



関口久子さん

私の勤務している地域包括センターには、高齢者をめぐるさまざまな相談が寄せられます。介護者の大半は女性で、虐待問題の多くは当事者の成育歴に根ざしています。現場からの視点で男女共同参画の課題に迫りたいと思います。



生るときから抱えてきた「留学したい」という希望を、持ち前のチャレンジ精神で実現させました。

他の人への親切で恩返し

ウルルマさんは、留学生・研究生として勉強し、新潟の大学で修士号を、鳥取大学で農学博士号を取得。その後、東京農工大学若手高度人材養成対象の연구원として、名古屋のコンサルタント会社に勤めました。これまでに、生活費などを工面するため、レジ打ちや清掃、ラーメン店などのアルバイトも経験。研究の時間や場所がなく、勤務先の洗面所で勉強していたこともあるそうです。

日本に来て、楽しい思い出ばかりではなく、苦労もあったようですが、かわった多くの人は親切で、いろいろ助けられたといいます。その分、これからは、自分も他の人に親切にしたり、役に立つことで、その頃のお返しをしたいとウルルマさんは語ります。

砂漠の緑化に貢献したい

郷里では、砂漠化する地域の緑化事業において、人的資源や技術提供など

中国内モンゴル自治区(2007年末現在)
面積 118万5000平方キロメートル
人口 約2400万人(2006年末)
区都フフホト市
出典 「中国年鑑2010」 社団法人中国研究編 発行(2010)



今回、取材・執筆した片山さんとウルルマさんは、視覚障害のある片山さんのボランティアに、ウルルマさんが応募したことが縁で出会いました。「力仕事でも何でも役に立ちたい」との言葉に片山さんは感激し、本誌での紹介が実現。苦労を見せない明るいウルルマさんの姿に、今後この国へ行って北区を忘れてないで活躍してほしいと願う、片山さんです。「写真は、ウルルマさん(左)、片山さん(右)、片山さんのガイドヘルパー・黒沢さん(中央)」

の面で、日本の活躍が見られるそうです。ウルルマさんも、そうした様子から、乾燥地帯の緑化に関する知識を得たいと、日本への留学を志したとのこと。故郷のよりよい環境づくりに、留学経験を活かしたいという夢を、いきいきと語るウルルマさんでした。

(22年度ゆうレポート執筆者 片山郷子)

北区で暮らす世界の女性たち

No.7

故郷の緑化に貢献することが目標 ウルルマさん

(中国内モンゴル自治区出身)



地理教師から一転、初めての留学

ウルルマさんは中国内モンゴル自治区出身。今から8年前に、留学生として来日しました。まったく知人のいない状況で、私費の渡航でしたが、新潟空港へ足を降ろしたとき、すでに、日本で長期間、がんばっていく決意があったそうです。

6人きょうだいの3番目として生まれたウルルマさん。姉妹が多い環境で、男女の区別なく育てられ、仕事をもつこと、研究を志すことは自然だったようです。

大学を卒業後、中学・高校の地理の教員として15年ものキャリアを積み、たウルルマさん。30代に入る頃、中学

※ゆうレポート執筆者は、21年度開催「スペースゆりライター養成講座」修了生で、本誌で記事執筆等をする区民の方々です。

情報コーナー

講座「さんかく大学—支え合う 家族と隣人」を開催しました。

人身取引や介護などを取り上げた連続講座の一部をご紹介します。

●第1回 12月10日

「DV～夫婦なのに恋人なのになぜ？」

講師 沼崎一郎さん 東北大学大学院教授／参加人数 26名
 初めに、スペースゆうの21年度「こころと生き方・DV相談」の利用傾向のお話があり、その後、講演とワークショップが行われました。内容は、①我々は、DVとは単なる「けんか」ではなく、「犯罪」であることを認識する必要がある。加害者は、相手を支配する手段として暴力を選んでいる。②被害者にならないためには、「愛」とは何かをとら直す。そして、2人だと楽しいが1人でも大丈夫という関係をパートナーと築くことが大切である。③ワークショップの参加者の声として、「多くの男性の聴講が望ましい」「そのためにリーフレットの工夫を」などがありました。

この講座から、「暴力」へのメディアリテラシーの必要性を痛感しました。純愛ものとされている映画や、子ども向けのアクションヒーロー。その中で我々は、知らぬ間に「暴力」を肯定しているのかもしれない。

(22年度ゆうレポート執筆者 大森美穂)



●第2回 12月17日

「身近にある児童虐待」

講師 石崎一記さん 東京成徳大学大学院教授／参加人数 21名
 虐待と聞くと「未熟な親」に焦点が絞られがちですが、みんな始めは「親」初心者。周囲の関心を得て、未熟な子育ては修正されながら親も子も育つものです。その機会を持てなかったという意味では「虐待者は加害者」と言い切ることができず、そこに問題の難しさがあるといえます。周囲が見聞きできる場で虐待を行うなどサインが出ている場合も多く、地域の人が孤立させないことがとても大切であるというお話でした。

北区は、子ども家庭支援センター「育ち愛ほっと館」が中心となり対応にあたっています。何よりも早期発見が大事。通報者のプライバシーは守られますので、気になるときは迷わず相談、連絡をしてほしいということでした。

(22年度ゆうレポート執筆者 矢幡澄恵)

★育ち愛ほっと館

児童虐待相談専用電話 03-3912-1894



スペースゆうのお薦め図書

スペースゆうの情報コーナーでは、男女共同参画や自分らしい生き方に関する資料を揃えています。ぜひお立ち寄りください。

「女性社員のトリセツ(取扱説明書)」

—なぜ上司の気づかいは通じないのか?

前川孝雄・著／ダイヤモンド社／2008

雇用形態が多様化し、増える女性社員。その活用は企業にとり避けられない命題ですが、男性上司は扱い方に悩むことも。雑誌やWEB制作という女性比率の高い現場に長く携わってきた筆者が、女性社員の本音と生態に迫ります。タイプ別に語られる彼女たちの描写は体験に基づき説得力十分。女性にも新しい視点を与えてくれる1冊です。(22年度ゆうレポート執筆者 矢幡澄恵)



「専業主婦のキャリア再開発」

—もう一度仕事に戻るには

奥津真里・著／風間書房／2010

子育て後に再就職したおよそ2,000人の女性たちにアンケート調査を実施し、その調査結果と個別面接の事例を通して、女性の再就職についての現状、問題点を解説した書。女性の再就職の時期は子どもの年齢に大きく関連があり、子どもの成長に合わせることでキャリアを発展させている様子がうかがわれます。きめ細かい視点と分析は、どのような支援が必要か教えてくれます。



表・紙・紹・介 GALLERY

野菜

制作/ディサービス commons 花みずきの会



王子本町の通所介護施設を利用している方を中心に、共同で作った貼り絵作品。絵を描いたり、着地物を使った小物を作ったりして、豊かな感性を育み、意欲を高める制作活動に取り組む皆さん。住み慣れた町で生き生きと年を重ねていこうという思いが溢れる作品です。



編集後記

充実した生活を送るためには、仕事とプライベートのバランスのとれた生活を送れるかどうか、重要な鍵になります。最近、よく耳にするようになった「ワーク・ライフ・バランス(仕事と生活の調和)」という言葉。今号では、「ワーク・ライフ・バランス」推進のために北区が取り組んでいること、先進的な取り組みを行っている区内企業の紹介とその表彰の様子を特集しました。

「ワーク・ライフ・バランス」の実現は、私たち一人ひとりの努力だけでは限界があります。しかし、まず私たち一人ひとりができる身近なところから一歩を踏み出していくことで何かが変わるかもしれません。

限られた1日の時間の中で、仕事とプライベートの時間を明確に区別し、目標をもって時間を有効に使うことを心がけ、メリハリのある充実した1日を送ることから始めてみませんか。

男女共同参画センター「スペースゆう」へ来てみませんか?

所在地 〒114-8503 北区王子 1-11-1 北とびあ 5・6階

TEL 03-3913-0161

FAX 03-3913-0081



・東京メトロ南北線王子駅5番出口直結 ・JR京浜東北線王子駅北口徒歩2分
 ・都電荒川線王子駅前徒歩2分